

青少年くらしき

家庭版

発行 倉敷市教育委員会  
編集 生涯学習課  
☎ 426-3845

9月



# 『支援』を学ぼう (後編)

令和2年2月、倉敷市立短期大学 保育学科 准教授 平岡敦子先生を迎えて、令和元年度くらしき市民講座『支援』を学ぼうが開催されました。講義要旨の後半をお届けします。

## 支援されることの難しさ

支援は、するよりされるほうが難しいです。支援されることになぜ難しいのか、そこに気づいていかなないと、利用者がその支援を利用するに至らない、その背景の理解に結びつかないと思います。

人は皆それぞれの価値観、自分の中で大切にしているものがあります。それが、支援を受けるとき、自分の中で引っかかりを持ってしまふことがあります。例えば、自分がどうみられているか(他者評価)で自分はみたくないと思われてないかなどです。「きれいにみられている。だからしなくみられている。」そんなふう

なふうに分かちあひたり思われたりするのが嫌で、黙って

たほうがいいとか、できる人と言われているのに、そうでもないといみられたくない。自分自身の価値を下げてしまふことは恥ずかしい。そういう思いはなかなか他人には出せません。出したらありますが、だれもがみともない自分をみてもらいたいとは思いません。それをみせることは、恥ずかしくてできません。「ここまでがんばったのにできなかつた。」というのを強調して話したり、逆に寡黙になつてしまつたりということがあります。

支援する時には、支援される

人の中にあるものを大切にすることが、大事なことと言われています。

## 支援する側・される側をつなぐのは対話

支援を考えるとき、支援する側・される側が、お互いの意図を理解することの大切さは、前述したとおりです。その意図を理解するには「対話」が必要です。

「あつ、この人、がんばったんだ。」「難しかったね。よくやったね。」と支援する側が、その人自身やものすごく苦労してきた。「話せた。」「なんか感覚をつかんだ。」と、本当にやりた

いと望んでいることや不安や課題について、本人自身を少しずつ出していく。このように支援する側・される側が、一緒に話すことが「対話」です。

対話は、対等なあいさつから始まり、会話の中から、その人の世界というものを探り、「あつ、それってどういうこと。」「そのとき、どういう状況だった。」という話をしていく中で、確かな

信頼関係が構築されていきます。

対話というのはモノローグ、いわゆる自分一人の語りではありません。相手があって、二人の間での語り合いです。一方的にどちらかが話すのではなく、お互いのやり取りです。相手の話を聞いていくうちに、だんだんその人の世界が自分の中で繰り広げられていきます。この言葉のキャッチボールが、その人をほぐしていくとても大きな力になります。

対話とは、本人が本当にやりたいと望んでいるのか、本人の目線を中心しながら、不安や課題について本人自身の語る力を少しずつ引き出すということです。

つまり、本人と一緒に行動し、信頼関係を構築することです。「こうしたらいいよ。」という指導的、指示的なものではなく、とにかく対話を重ねることです。





「犬ともぐら」クレヨン・シャボン液  
倉敷市立豊洲小学校  
2年 大山 紗和 (令和元年度)

うまく丸ができなかったところがしっぽに見えたので犬をかきました。おさんぽ中の犬がもぐらと会ったところです。

「自分は、こうしたい。」「今、あなたには、こういうふうにあつてほしい。」という「相手の意図」、「こちらの意図」をそれぞれができるだけオープンにしていくことが大切です。このように関わることを「オープンな協力」

「自分は、それしてほしくない。」とか、「いや、それ、自分がやってほしい形とちよつと違うんだけど。」と、支援のゴールを決めたり、こうしていいこうという方針を考えたりするときに、問題意識を共有することができません。対人関係の根源は、存在の尊重と主体性の喚起、支え合いの促進と言われています。

**支援に必要とされるもの**

支援に必要とされるものは、どのようなことだったでしょうか。

一つ目は、支援する側が相手以上に自分の意図を全面に出さないことです。

二つ目に、相手への押し付けにならないことです。「こうなってほしい。」「なんでこんなこと



(おわり)

## オープンな協力を大切に

対話を重ねることで、不安や悩みの大半がほぐされ、専門的なカウンセリングやリハビリにまで至らずに、その人が自分で回復するきっかけを見出していく。

「あつ、話せたな。自分でなんか感覚をつかんだな。」と表情が変わり、自分自身の行動を変えていくことができるようになります。

「自分は、こうしたい。」「今、あなたには、こういうふうにあつてほしい。」という「相手の意図」、「こちらの意図」をそれぞれができるだけオープンにしていくことが大切です。このように関わることを「オープンな協力」

「自分は、それしてほしくない。」とか、「いや、それ、自分がやってほしい形とちよつと違うんだけど。」と、支援のゴールを決めたり、こうしていいこうという方針を考えたりするときに、問題意識を共有することができません。対人関係の根源は、存在の尊重と主体性の喚起、支え合いの促進と言われています。

「自分は、それしてほしくない。」とか、「いや、それ、自分がやってほしい形とちよつと違うんだけど。」と、支援のゴールを決めたり、こうしていいこうという方針を考えたりするときに、問題意識を共有することができません。対人関係の根源は、存在の尊重と主体性の喚起、支え合いの促進と言われています。

「自分は、それしてほしくない。」とか、「いや、それ、自分がやってほしい形とちよつと違うんだけど。」と、支援のゴールを決めたり、こうしていいこうという方針を考えたりするときに、問題意識を共有することができません。対人関係の根源は、存在の尊重と主体性の喚起、支え合いの促進と言われています。

「自分は、それしてほしくない。」とか、「いや、それ、自分がやってほしい形とちよつと違うんだけど。」と、支援のゴールを決めたり、こうしていいこうという方針を考えたりするときに、問題意識を共有することができません。対人関係の根源は、存在の尊重と主体性の喚起、支え合いの促進と言われています。

「自分は、それしてほしくない。」とか、「いや、それ、自分がやってほしい形とちよつと違うんだけど。」と、支援のゴールを決めたり、こうしていいこうという方針を考えたりするときに、問題意識を共有することができません。対人関係の根源は、存在の尊重と主体性の喚起、支え合いの促進と言われています。